The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近代日本の国民国家の形成過程における「朝鮮観」の構築 ： 「征韓論」の人類学的解釈を中心として
Author(s)	張, 竜傑
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40104
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 2 】

氏　　名	張（ちゃん）　竜　傑（よんごる）
博士の専攻分野の名称	博　　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　12735　号
学位授与年月日	平成 8 年 11 月 29 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科　人間学専攻
学 位 論 文 名	**近代日本の国民国家の形成過程における「朝鮮観」の構築 —「征韓論」の人類学的解釈を中心として—**
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授　春日　直樹 (副査) 教 授　厚東　洋輔　　教 授　三島　憲一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は「近代日本の国民国家の形成過程における「朝鮮観」の構築—「征韓論」の人類学的解釈を中心として—」と題し，明治 6 年政治事件である「征韓論」の分析を通じて，近代日本の国民国家創造の過程を考察する。すなわち，日本は朝鮮を如何なるものとして認識し直し，それによって自己の近代国家としてのアイデンティティと統治原理をどのように確定するに至ったのか，について明らかにするものである。

・従来の研究と比較した本論文の独創性

「征韓論」に関する従来の研究は，政策や政権を巡る「権力争い」に焦点を当てるものと，朝鮮やアジアへの「侵略」としてアプローチするものが支配的である。いずれにおいても「征韓論」の中心人物である西郷と大久保が征韓論者か非征韓論者か，という問題が大きく取り扱われている。しかしながらこうした政治史的な研究では，「征韓論」を巡る当時の文化的文脈が十分に検討されているといい難い。「征韓論」とは，明治維新後の社会的文化的変動や西洋の異文化から自分を守ろうとする当時の日本人のアイデンティティと密接な関わりをもっており，日本と朝鮮の外交摩擦の背後には文化的な摩擦が厳然と存在している。近代国家としての日本が急激な社会的文化的変化の中で創造されたとき，日本人としての新しいアイデンティティと他者観が「征韓論」という問題に凝縮されてあらわれたのである。本論はこのように，「征韓論」を文化の問題として捉え直すことにより，人類学的な解釈を試みるものである。

人類学的解釈の導入は，歴史学においても近年広く行われつつあり，たとえば，ロバート・ダーントンは，『猫の大虐殺』という一連の事件を通して民衆の心性＝文化を再構成して新しい理解を提示している。またギアーツは政治と文化の関係について論じる際に，文化を意味の構造として捉え，政治をその意味の構造が現れる場として捉えて両者の関係を明確にしようとする。彼はイデオロギーが社会的，心理的な緊張と，その緊張を理解するための文化的手段の欠如が合流し，互いに強くなったときに現れると述べている。これらの研究は，歴史的で政治的な事件としての「征韓論」に対し，異文化（＝他者）や近代国家建設の問題としてアプローチする方向を開いてくれている。

本論文は以上のように，「征韓論」を単なる政治的対立や植民地主義の一要素とは捉えずに，当時の社会・文化的な状況の中に位置付けることにより，改めて，その意味を検討するものである。

・論文の構成と内容

論文全体は，6章からなる。1章「序論」では，先行研究を検討し，論文のテーマと研究視点を明らかにする。2章と3章では近世における日朝関係と当時の社会・文化的動態を概括し，4章では，「征韓」の発端の原因を追究する。そして5章において，「征韓論」の意味と朝鮮観の構築を明らかにするものである。

「征韓論」の社会的文化的背景は，まず2章において近世日本と朝鮮との関係を巡って検討される。この関係は平等かつ友好的なものとして定式化されてきたが，実際には文化的な無理解とゆがみの上に成立したものであったことを明らかにする。たとえば外交は相互性を欠いており，「見せる」/「見る」という儀礼的な次元にとどまっていた。両国はともに儒教という異文化を通して自己中心主義的な文化翻訳を行い，中国を中心としたアジア的ヒエラルキー構造の中でお互いの文化的優越感と政治的優越感を強調した。従って，「近世は善隣関係，近代は不幸な侵略」という二項対立的な時代像は，批判され退けられることになる。

3章では，新たな他者つまり西洋と接しながら近代国家の構築をはかった日本について，天皇制イデオロギーを中心に分析を試みる。「攘夷と開国」，「自己喪失と自己創造」，「伝統と近代」という文化的葛藤は，これらの矛盾をすべて包摂し，かつ超越する位相において純粋で神聖な模範的中心(モデル)，つまり天皇を設定することによって止場される。このあいまいにして純粋な絶対者の下で，伝統文化と西洋文明，開国と攘夷などの対立見解と運動が烈しくしのぎを削っていた状況こそが，「征韓論」の社会的文化的背景として指摘される。

4章では，「征韓」の原因となった両国の外交摩擦について，これを青木保の「文化の否定性」の議論を参考にしながら，政法的摩擦ではなく文化的摩擦として捉え直す。つまり，日朝相互の社会的文化的な文脈のズレに注目することによって，文化コミュニケーションの不調和を明らかにするものである。朝鮮は明治政府の新たな外交関係の要求を拒否し，その理由として国書の中の「皇」という文字の使用，及び江戸幕府を倒し西洋文明への積極的な開国を行う明治政府の態度を挙げた。前者は，中国だけが「皇」を使いうるというアジアヒエラルキー構造に属している朝鮮と属していない日本とのアジア観のずれによって生じている。つまり，朝鮮の側には「自文化中心主義」的な普遍主義（平等主義の主張）が，日本の側には「自文化中心主義」的な相対主義（優越意識）が認められる。朝鮮では開国を迫る西洋に対抗して，大院君を中心に王権を強化し，鎖国と「武」を強調する新しい政治体制ができいた。そこで西洋の文明を受容する日本に不満を持った朝鮮は天皇を否定し，一方の日本は対抗して「征韓」を主張するに至るのである。

5章では，近代国家日本のアイデンティティを構築する過程で現れた「朝鮮観」について，トドロフの「他者観」及びギーアツの新興国家を巡って提起したエッセンシャリズム／エポカリズムという対概念を用いつつ明らかにする。まず，「征韓」の根本には天皇を否定した朝鮮と対等に戦うという，主君に対する武士の忠誠心ともいえる伝統的な武士の考えがあり，そこでは朝鮮が「征伐」すべき「天皇の敵」として武士道の世界に導かれる。西洋の侵略によって国家が危機にされされた日本では，一方に朝鮮を「征服」して国家の力を強くすることを主張し（吉田松陰他），もう一方に朝鮮と「同盟」を結んで西洋に対抗するべきことを主張する（勝海舟）という立場があらわれる。しかしいずれにおいても，朝鮮は資源の生産地にすぎず，江戸幕府（伝統）の残像となるにすぎない。つまり，彼らは本当の朝鮮を見るのではなく，西洋によって傷つけられた自分の姿を朝鮮を通して表現するだけである。このように「征韓」はモノローグ的な個人的意見として様々な形で提起され，それによって朝鮮のイメージも多様な姿を見せていた。しかしながら「征韓論」においては，それらの諸意見が西郷と大久保という両人物によって，対照的で集約された形に結晶化する。このとき，「征韓論」は単に朝鮮侵略を巡る議論ではなく，明治維新後の日本が近代国家としてのアイデンティティを如何に作り出すかという大問題に直結するものとなり，新たな日本にとっての「朝鮮観」を形成する決定的な場となっている。西郷の場合には，「武士道」という反西洋的なエッセンシャリズムが根本に据えられて，国家の改革が強調される。主君＝天皇への忠を貫く「武士」たる彼にとって，朝鮮は対話すべき対象でありながら，天皇の敵であり征伐の対象でもある。一方，国家創造を西洋と同様な形態によって成し遂げようとするエポカリズムを全面に押し出す大久保にとって，朝鮮は先進日本の責任をもって「開国」させ文明化させるべき国となる。西郷の主張が大久保に破れる過程とは，日本の国家統治原理が主君との一対一の個別的な絆を基盤とする「武士道」から，一

般性をそなえた組織的統制へと重心を移していく過程であり，同時に日本にとって，近代化の指導者／被指導者という非対称的な関係が，軍や官僚などの新しい組織を通じて生み出されようとする過程でもあった。

このように「征韓論」とは，近代国家日本のあり方を賭けた問題であり，日本人としてのアイデンティティが他者（＝朝鮮）を通じて構築されてきたことを集約的に物語るものである。本論文の試みた「征韓論」の再検討が，日韓両国の関係に新たな視点を開くことを期待したい。

論文審査の結果の要旨

本論文は，「征韓論」を「侵略」「植民地支配」あるいは「権力闘争」の観点から分析してきた従来の研究方向をあらため，これを文化の問題として再提起し，近代日本における「朝鮮観」の形成過程を明らかにすることに成功している。しかも論文は，単に「征韓論」の再解釈を意図しただけでなく，日本―朝鮮間のコミュニケーションのズレやそれぞれの自文化中心性を江戸期にまで遡って跡づけながら，「近くて遠い国」同士が今日まで抱える問題を，異文化理解という位相に的確に位置づけている。本審査委員会はその視点のあたらしさと分析の説得力，ならびに深い喚起性を評価して，博士（人間科学）の授与に値すると判断するものである。張竜傑氏が博士号取得を契機としてますます研究を発展させ，日韓関係のあたらしい論客として活躍することを期待したい。